清川村立緑小学校

研究テーマ：「自立・協働・創造」～清川村から羽ばたく児童の育成～

１　実践の目的

本校では、学校教育目標である「自ら立ち、他者を認め、未来を創る児童の育成」を実現するために、児童が集団や社会の一員としての意識をもち、主体的に考え行動する力を育むことを目的とした研究に取り組んでいる。

本校は小規模校であるため、児童同士の関係が固定化しやすく、また、大人の支援を受ける機会が多いことから、児童が受け身になりやすいという課題がある。そこで、児童が多様な人々と関わりながら、主体的に学び、仲間と協力して新たな価値を創造する力を身につけることが重要だと考えている。そのため、本校では異学年交流や縦割り活動をはじめとする交流学習を充実させ、学年の枠を超えて学び合う機会を増やす取り組みを進めている。この活動を通じて、児童は自ら考え、仲間と協力しながら課題を解決する力を養うとともに、相手の立場を理解し、互いに尊重しながら関わる力を育んでいる。また、学級や学校という枠を超え、より広い視野を持って行動できるようになることを目指している。

２　実践の内容

（１）校内研究の体制

校内研究推進委員会により、研究の方向性や具体的な取組を協議した後、全体会議にて図り、全職員が同じ意識で研究に取り組むようにしてきた。

年間５回の授業研究では、東京学芸大学の大村龍太郎先生を講師に招き、今後の指導の在り方について学んだ。「教育目標が明確であれば、ほめ方が変わる」「ほめることは価値形成への支援である」などの視点を大切にし、授業改善につなげた。

（２）研究授業・研究協議の様子

低学年は、音楽の授業において小グループでの話し合いを重ね、他者と協働することで新たな考えを生み出し、気付きを得る経験を積んだ。友だちの意見を聞き、自分の考えと照らし合わせながら深めていくことで、表現の幅が広がる様子が見られた。中学年では、外国語活動で話し合いを通じた課題解決力の向上を目指し、以下の２点を意識して指導を行った。①自分たちのチームの課題を見出し、解決策を話し合う中で意見をすり合わせ、合意形成を図ること。②それぞれの役割を意識し、互いに励まし合いながら協力して活動を進めること。こうした取組により、児童は仲間との対話を通じて考えを深め、協力して課題を乗り越える力を養うことができた。高学年では、学校全体に関わる行事の企画・運営を中心となって担い、自分事として考える機会を増やした。自ら動くことで責任感を持ち、リーダーシップを発揮する場面が多く見られた。また、異学年交流での取組の１つとして、プログラミング学習では、「適度な」難易度の課題設定をすることで、試行錯誤を重ねながら主体的に取り組む姿が見られた。思考→検証→再試行のプロセスの中で、プログラミング的思考が働き、協力しながら問題を解決する力が育まれていた。特に、縦割り活動の中で学年を超えて助け合う姿が見られたことは、大きな成長の一つである。今後は、

異学年交流をより深めるとともに、児童自身が成長を実感できる振り返りの場を充実させたいと考える。活動の中で得た学びを言葉にすることで、児童が自らの成長を客観的に認識し、次のステップへとつなげていけるよう支援していきたい。

３　実践の成果

様々な交流活動を行うことで、児童が新しい考えをもつきっかけが増え、多様な相手と関わる中で成長する姿が見られた。特に異学年交流では、普段の学級とは違った児童の姿が見られ、上学年が下学年に対して積極的に話しかけたり、優しく説明したりする場面が多く見られた。こうした関わりを通じて、上学年は「教える」経験を重ねることでリーダーシップを学び、下学年は「学ぶ」ことで次に自分が上学年になったときの役割を意識するようになってきた。小規模校だからこそ、学年を越えたつながりを大切にしながら、児童同士が支え合う場を多く設けることができたと感じている。

また、「自ら考え、行動する力」を育てることを目指し、事前の準備や計画を工夫した。例えば、児童が主体的に活動できるように、あえて細かい指示を出しすぎず、どうすればよいかを一緒に考える場を設けた。その結果、最初は受け身で指示を待っていた児童も、次第に自分から「こうしてみたらどうだろう？」と考えを出すようになり、クラスや活動の場で積極的な発言が増えていった。さらに、教員も児童のアイデアを引き出すことを意識し、問いかけを工夫したり、考えを深めるサポートを行ったりすることで、児童の主体性を尊重しながら学びを進めることができた。

４　今後の展開

これまでの取組を通して、子どもたちが自分で考え、行動できるようになるためには、もっと工夫や努力が必要だと感じた。特に、異学年での交流活動を増やし、いろいろな考え方に触れる機会を作ることは大切だが、それと同じくらい学級での活動も大事にしていきたい。そして、学級の仲間と協力しながら考えたり、意見を出し合ったりすることで、安心して自分の思いを伝える力を育むことができる。学級の中で自信をつけたことが、異学年の交流にもつながると考えている。

また、子どもたちが「やってみよう！」と思えるような環境を作ることも重要である。失敗を怖がらずに挑戦できるよう、「どうすればうまくいくかな？」と一緒に考えたり、うまくいったことをしっかり認めたりすることで、自信をもって取り組めるようにしたい。学級でも異学年でも、自分の意見を伝えたり、人の話を聞いたりする経験を重ねることで、より深い学びが生まれると思われる。

さらに、教員の中でも「こういうやり方がよかった」「この活動はこんなふうに工夫することができる」といった情報を共有し、お互いに学び合えるようにしていく。そうすることで、子どもたちに対する教員の関わり方の質的向上につながると考えている。

最後に、子どもたちが「自分はできる！」と自信をもち、自分の考えや行動に責任をもてるよう、これからも支えていきたい。こうした取組を続けることで、子どもたちは学級や異学年での活動を通して成長し、自分の考えをはっきり伝える力や、周りの人をまとめて引っ張る力を身につけていき、その経験が自信につながり、将来さまざまな場面で行かせる力につながると考えている。